

バンコクにおける日本コンテンツ市場調査

Japanese Content Market Research in Bangkok

臼井 直也 USUI Naoya

デジタルハリウッド大学 准教授
Digital Hollywood University, Associate Professor

タイのバンコクにおいて行った日本のコンテンツに関する市場調査のレポートである。現地調査の結果、バンコクには「アニメイト」や「ガンダムベース」などの公式ショップが展開されている一方、個人経営の店舗が入っている商業施設やマーケットでは偽物の商品や海賊版商品も多数存在し、消費者は両者の間で消費活動を行っていることが明らかとなった。また、日本で行われているコラボイベントがバンコクにおいてもリアルタイムで行われている点、また日本にはない独自のコラボやバンコクオリジナルの企画が行われているという特徴も見られた。さらにアニメファンに聞き取り調査を行ったところ、グッズの購入以外にもコスプレイベントへの参加などで日本のコンテンツへと接触していたことが明らかとなった。

1. はじめに

タイは東南アジアでも日本のコンテンツ受容が盛んな国である。例えば、一般社団法人日本動画協会の『アニメ産業レポート2022』では、アニメの契約作品数は「30以上100未満」の地域であり、東南アジアではインドネシアやシンガポール、フィリピンと、他の地域ではオーストラリアやフランスなどと同程度の契約数となっている日本アニメの主要受容国である^[1]。日本のコンテンツへの関心は高く、アニメイトなどがバンコク支店を構えるほどであり、また、筆者の専門である日本語教育に関していえば、日本語の学習動機はアニメ等への関心から大きい。

筆者は、2023年8月16日から23日までバンコクに滞在し日本コンテンツの市場調査を行った。

2. 調査方法

2.1 予備調査

バンコクでの調査に先立ち、本学に所属しているバンコク出身の留学生にインタビューを行い、バンコクでの調査対象となる施設やイベントなどを確認した。

また、現地の日本コンテンツ消費者への聞き取り調査を目的として、ラチャモンコンラタナコーシン工科大学教養学部日本語学科に所属している学生との座談会を企画し、現地の教員との打ち合わせを行い日時、参加者の条件等を確認した。

2.2 本調査

予備調査の結果、バンコク現地での調査対象を以下に決定した。

1. 公式ショップまたは公式イベント
2. アニメグッズ等を多く扱う店舗
3. アニメグッズ等が多く出品されるイベント
4. 日本コンテンツに関心を持つ日本語学習者

1については、「アニメイト」「紀伊國屋書店」「ガンダムベース」また期間限定ではあるがバンコクで開催されていた『スタジオジブリ展』などを調査対象とした。2についてはフィギュアを販売する店舗が集まっている「メガプラザ」という商業施設、3については現地で「泥棒市場」と称されるクロントム市場のナイトマーケットを調査対象とした。

アニメファンへのインタビュー調査は半構造化による座談会形式、

協力者は9名である。座談会のテーマは「好きな作品」「アニメを見る以外の活動」などである。

3. 調査結果

3.1 日本コンテンツの表の市場

本節では、主に公式ショップや公式イベントなど、正規品である商品の市場について報告する。なお、本稿におけるタイ通貨であるバーツの調査時のレートは「1バーツ=約4円」であった。

バンコクの日本コンテンツ受容の中心地は市内の中心に位置するサイアム地区にある「MBKセンター」という商業施設にあるアニメイトである。同じフロアには「アニメイトカフェ」、カラオケチェーン店の「まねきねこ」や秋葉原に本店を構えるメイドカフェ「めいどりーみん」のMBK店、バンコクを本拠地とするグループ「BNK48」の関連施設のほかにフィギュアを扱う店もあり、日本の文化を身近に感じることができる場所となっている。

アニメイトで取り扱っている商品は日本とほぼ同様であった。マンガは原語である日本語版のマンガの一部が置かれているコーナーもあったが、それ以外はタイ語版のものだった。小学館、講談社、KADOKAWAなどの出版社別の書棚のほか、百合・BLなどのジャンル別の書棚、そして画集やHow to本などもコーナーが設置されていた。金額はタイ語版のものは100バーツ前後(約400円)であった。特殊な例としては『ONE PIECE』が2つのバージョンで出版されていたことが挙げられる。どちらも出版社は「SIAM INTER COMICS」であるが、安価な方は1冊45バーツ(約180円)と低い価格設定である一方、日本の単行本の表紙と同じデザインであり紙の質もよいバージョンは125バーツ(約500円)であった。網羅的に把握はできなかったが、近年の作品は100バーツ前後の価格、過去の作品で印刷の質などがあまりよくないものはその半額程度の価格であった。また、日本語版のマンガは日本での販売価格と比較し割高に設定されており、定価550円のが175バーツ(約700円)、726円のが272バーツ(約1088円)などとなっていた。

また、店内の比較的目的につきやすいゾーンには音楽に関するコーナーがあり、調査時には『推しの子』と『ぼっち・ざ・ろっく!』のCD、アルバムコーナーが設置されていた。さらに、モニターではMVも再生されており、人気作品の主題歌や劇中歌などへの関心の高さも窺えた。

入口近くは多くがマンガの書棚であるが、奥にはマンガ以外の商品も数多く置かれており、ガンブラやフィギュア、アクリルキーホル

ダーやアクリルスタンド、ぬいぐるみや文房具など多種多様な品揃えであった。また、レジでは日本同様「一番くじ」が置かれており、調査時には日本で2022年12月27日から販売が始まった「一番くじ ワンピース 覇王ノ兆 with ONE PIECE TREASURE CRUISE」や日本では2022年9月10日から販売が始まった「一番くじ エヴァンゲリオン ～裏コード、ザ・ビースト!～」が売られており、日本の店舗同様に現在どの賞が何枚出ているかという掲示もなされていた。また、店内のコーナーの一つでは壁一面に新作のリリース情報についての紙が貼られていたが、アイドルアニメのライブDVDやBlu-ray、声優の楽曲、2.5次元のBlu-ray、VTuberの楽曲など多様な情報が発信されていた。さらに店内のモニターではアニメイトの情報番組である『アニ☆館』が字幕もなく放送されており、店内にいる間は日本の店舗にいるような錯覚に陥るほどであった。

アニメイトと比較される店舗としては、紀伊國屋書店バンコク店が挙げられる。アニメイトと同様にサイアム地区の「セントラルワールド」にある紀伊國屋書店ではもちろん書籍が中心であることから、日本コンテンツの中でもマンガやアニメ関連書籍を中心とした取り扱いであったが、一部アニメやゲームキャラクターの文房具のほかにはアクリルスタンドやキーホルダーなどのグッズも置かれていた。

大部分を占めるマンガであるが、アニメイトとの大きな違いは英語版の占める割合が多いことである。『NARUTO』など過去に発売されたマンガなどは一部タイ語版も売られていたが、『鬼滅の刃』など比較的新しい作品や『チェンソーマン』『推しの子』『SPY×FAMILY』など日本でも連載中のマンガは英語版しか置かれていなかった。この点においては、タイ語版か日本語版の取り扱いが中心であったアニメイトとは明確な棲み分けがなされているといえるだろう。価格は前述のタイ語版『NARUTO』は1冊95(約380円)パーツでアニメイトと大きな差はなかったが、英語版は例えば『SPY×FAMILY』が367パーツ(約1500円)で売られているなど、日本の販売価格および前述のアニメイトにおけるタイ語版の販売価格と比べると高い価格設定であった。

紀伊國屋書店バンコク店での英語版マンガであるが、出版社を確認したところ、人気作品の多くはアメリカに本社がある「VIZ MEDIA」であった。「株式会社小学館集英社プロダクション」の関連会社として知られている「VIZ MEDIA」であるが、バンコクにおける少年ジャンプ作品の人気を考えるとマンガ出版では大きなシェアを占めていると考えられる。それ以外には、同じくアメリカに本社を置きKADOKAWAとの合併を行った「Yen Press」社が『推しの子』などの人気作品の出版社であった。両社のタイにおけるシェア比率などは今後の調査が必要であるが、平積みされている人気作品の多さを鑑みるに「VIZ MEDIA」社がより大きいシェアを占めている可能性があると考えられる。

次はガンプラを中心に扱うガンダムベースだが、東南アジア初の旗艦店であるバンコク店は、同じくサイアム地区にある「サイアムセンター」という商業施設に入っており、ビルの外にはガンダムの像が置かれている。隣の商業ビルとの連絡通路に置かれていることから、多くの買い物客の目に留まり、記念撮影をしている人も多かった。店内では調査時最新作の『水星の魔女』まで幅広い商品を取り扱っており、旗艦店だけあって現地ですぐ見つけたプラモデル専門店の中では品揃えは最も充実していた。金額は日本より割高になっており、例えば2023年4月22日に発売された「FULL MECHANICS 1/100 ガンダムエアリアル」は、日本での定価は4180円(税込み)だが、バンコクのガンダムベースでは1900パーツ(=約7600円)であった。プラモデルの金額は公式ショップでは相場との大きな差異はなく、アニメイトでは同商品が1750パーツ(=約7000円)と多少安く販売されていた。

次に、常設のイベントではなく期間限定でバンコクで開催されていたスタジオジブリ展『The World of Studio Ghibli's Animation Exhibition Bangkok 2023』について報告する。このイベントは

2023年7月1日から9月30日までサイアム地区にある「セントラルワールド」という商業施設で開催されていたイベントである。展示内容としては日本で2023年6月29日から9月24日まで開催された『金曜ロードショーとジブリ展』と同様の、作品のシーンを再現したセットの中に入場者も入り記念撮影ができるというものであった。グッズ売り場では日本国内でも販売されているジブリグッズが中心であったが、英語版の展示図録に加え、イベントのメインビジュアルやタイ語が印刷されたトトロのクリアファイル、ステッカーなどオリジナル商品も販売されていた。平日の夕方であったが入場者は一定数おり、バンコクでのスタジオジブリの人気の窺えた。

最後に、特筆すべき事例として、カラオケチェーン店まねきねこで展開されていたイベントについて報告する。調査時、日本の店舗ではANYCOLOR株式会社が運営するVTuberグループである「NIJISANJI EN」とのコラボイベント『NIJISANJI EN×まねきねこ Summer Vacation』が2023年7月26日から8月26日の期間で開催されていたが、バンコクの店舗においても同じ期間で開催されていたのである。日本とバンコクで同じイベントが同期間で開催されていることは、バンコクにおけるVTuber需要の高さを裏付けるものである。この点については、第3項で再度触れたい。また、時期はずれるものの、日本で2023年7月5日から8月7日まで開催されたアニメイトカフェと『アイドルリッシュセブン』とのコラボがアニメイトカフェのバンコク店でも開催されていた。

3.2 日本コンテンツの裏の市場

次に、公式ショップ以外で海賊版商品などを販売している「裏の市場」について報告する。このような商品を扱う店舗数は極めて多いと考えられることから、本調査ではフィギュアやおもちゃの小売店が数多く入っている「メガプラザ」という商業施設、およびバンコク市内で開かれているクローントム市場(通称「泥棒市場」)のナイトマーケットに限定してその状況を述べたい。

バンコクで販売されている数多くの日本コンテンツの商品の中で、ゲームは正規品であることが一般的である。クローントム市場においては改造されたハードやソフトを販売する人物を1名確認したが、一般的に最新ハードやそれに対応するソフトの海賊版を出すのは技術面でもコスト面で非常に困難であると考えられる。実際に本調査で訪れたゲーム販売店で扱っている商品は全て正規品であった。それに対して、本調査で最も商品の出自が怪しかったものは「フィギュア」であり、それは前述の2つの場所において確認できた。

メガプラザは前節の公式ショップのある商業施設が周辺に集まっているサイアム駅から電車で30分ほど離れているサムヨート駅近くにある商業施設である。1階から6階までおもちゃやフィギュアを扱う数十もの小売店がそれぞれ店を構えているが、一定数の店舗で明らかに権利元の許可を得ていない非正規品が販売されていた。非正規品であることが分かるのは、フィギュアが入っている箱に「アニメのおもちゃ」という正規品ではありえない文字が印刷されていたり、箱のデザインや印刷状態が非常に粗末だからである。

公式ショップでは基本的に日本からの商品を置いているが、このようなメガプラザで販売されている商品は大きく「第三国からのライセンス商品」「第三国からの非ライセンス商品」「出自不明の非ライセンス商品」の3つに分類できる。

「第三国からのライセンス商品」であるが、その多くは中国語圏からの商品であった。例えば、『SPY×FAMILY』の台湾ライセンスを所有している「木綿花国際」の情報がパッケージに印刷されている商品がこれにあたる。パッケージの裏には「MUSE 木綿花 LICENSE」および「LICENSED BY TOHO」の文字が記されており、パッケージに印刷されている作品タイトルやキャラクターの名前も漢字表記がされていた。

「第三国からの非ライセンス商品」だが、この場合も中国語圏からの商品が多かった。例えば、ポケモンのフィギュアが入っている箱

に中国語のピンインでキャラクター名が印刷されているが、ライセンスに関する情報が載っていない商品や、使われている漢字が繁体字であり、それ以外のひらがなやカタカナにミスが非常に多い商品である。

また、特殊な事例としては国籍不明のガレージキットが販売されていたことが挙げられる。6階にはサイズが大きく精巧で高価なガレージキットが多数売られている店舗があり、商品の多くは日本円で5万円から高いもので10万円以上する高額なものであった。その中に『鬼滅の刃』の登場人物である我妻善逸の9990パーツ(約4万円)のガレージキットがあったのだが、台座の部分に正規品には使われていない「雷の息吹」という印字がされていた。「雷の呼吸」は中国語圏においても「雷之呼吸」と表記されるため、他言語からの翻訳ミスである可能性が高い。タイ国内の個人によって制作された可能性も高いが、一般的なフィギュアと異なり箱などは存在しないため、これ以上の情報は不明である。

以上のように正規品と非正規品が入り混じるメガプラザであるが、消費者にとって最も困難な点は「正規品かの判断ができない」ということである。例えば同じメガプラザには映画のDVDを販売する店舗があったが、ビニールの袋に簡易的に入れられているだけであったり、日本でもパッケージ化されていない最新アニメ作品でさえも35パーツ(約140円)で売られていたりするなど、違法であることは明確である。また、前述のようなフィギュアは作品のファンであれば箱を見れば正規品かどうかは判断できるし、また言語的な知識があればそれも有用である。しかしながら、メガプラザだけでなくバンコクの商業施設で売られているフィギュアの多くはパッケージに入っておらずフィギュア本体のまま売られていることから、素人目には正規品かどうかの判断が極めて難しい。実際、箱は明らかに偽物である商品であっても、中に入っているフィギュアが一目で偽物とわかる商品は本調査では見つけることができなかった。

このような状況は、毎週土曜日と日曜日の夜に開催されるクロイントム市場のナイトマーケットでも同様である。メガプラザ同様、サムヨート駅の近くで開催されるこのフリーマーケットには、衣類からカメラなどの機器類、おもちゃや古本まで多種多様な物が売られているが、フィギュアなど日本コンテンツのグッズも多く売られていた。「泥棒市場」という通称からも分かるように出自不明な商品が数多く出回る市場であり、例えば調査時には『シン・仮面ライダー』の入場特典なども売られていた。箱に入っているサイズのフィギュアは客からは手が届かないような位置に置かれていることが多く詳細までは確認ができなかったが、一見するとメガプラザほど分かりやすい非正規品はなく、タイでも売られていたのであろう「一番くじ」の商品などが多かった。一方で、元から箱に入っていないようなサイズの小さいフィギュアはビニールの袋に入れて売られており、これらの商品は正規品かどうかの判断は困難であった。一目で分かる非正規品の例としては、ゲームを販売している店では明らかに違法なソフトが売られていたことである。

今回調査を行ったバンコクの中心部の一つであるサイアム駅周辺の商業施設には公式ショップが集まり正規品を扱い、それ以外の店舗でも非正規品を扱っている事例は見られなかった。高価な商品でも非正規品があることを考えると、バンコクにいる消費者たちは日本以上に「どこで買うかを判断する力」そして「正規品を見極める力」が必要であるといえるだろう。

3.3 バンコクにおける日本コンテンツの独自発展

本節では、日本のコンテンツがバンコクで独自に発展している2つの事例を報告する。

1つ目は、「とんかつまい泉」と『名探偵コナン』のコラボである。現地の店舗では、劇場版最新作である『名探偵コナン 黒鉄の魚影』(日本公開2023年4月14日)とのコラボが行われており、劇場版のキービジュアルが印刷されたかつサンドが販売されており、店舗前

ではコラボを大々的に宣伝していたが、このコラボは日本では行われていないタイオリジナルのものである。前述の『NIJISANJI EN × まねきねこ Summer Vacation』が日本とバンコクの同時展開であったのに対し、日本では展開されていないコラボがバンコクで開催されていたことは非常に興味深い事例である。

2つ目は正確には「日本コンテンツ」ではないが、バンコクでオリジナルのVTuberグループがデビューしていたことである。アニメイトの入り口の隣には壁一面に「ALGORHYTHM PROJECT Virtual Youtuber Group of Thailand」という文字とともに29のキャラクターのビジュアルが描かれたポスターが貼られており、2023年8月12日から9月3日までキャンペーンがアニメイト内でも行われていた。このプロジェクトについて公式サイトを確認したところ、バンコクに本社を置く「REALIC PRODUCTION CO., LTD.」によって2023年から運営が始まったばかりのプロジェクトであり、メンバーはポスターとは異なり27名であった。メンバーはさらに「APOCALYPSE」「ECLIPSE」などの3、4名からなる小さいグループに分かれており、アニメイトの店舗内には商品とともに各グループのキャラクターのスタンディパネルが置かれていた。日本を本拠地とする「NIJISANJI」や「hololive」が海外で現地VTuberグループを作るというケースはあるが、タイにおいて現地オリジナルのVTuberグループが展開していることは特筆すべき事例であるといえる。

3.4 アニメファンのファン活動

インタビューであるラチャモンコンラタナコーシン工科大学教養学部日本語学科に所属する学生に話を聞いた結果、まず基本情報として「好きな作品」を確認した結果、『鬼滅の刃』『ONE PIECE』『銀魂』『NARUTO』などの世界的に人気のある作品のほかにも、『あんさんぶるスターズ』や『刀剣乱舞』のような女性ファンの多い作品、『異世界おじさん』や『古見さんは、コミュ症です。』などの最近の作品まで様々であった。最新のアニメまでリアルタイムで把握できていることは後述する配信サイトが大きく寄与しているが、作品のラインナップを見る限りは中国や韓国などの東アジアのアニメ受容と大きな差異は見られない。

次に、これらの作品をどのように視聴しているかを確認したところ、全員がVODや配信サイトで視聴しているとのことであった。使っているサービスとしては、「Disney+」「NETFLIX」「YouTube」などの世界的なものほかに、「bilibili」のタイ語版サービスを利用している学生も多かった。さらに、日本ではあまり聞き慣れないサービスとしては、タイの通信事業者であるAISの「AIS PLAY」や、「FLIXER」などが挙げられた。

「アニメを見る以外の活動」については、コスプレ、グッズ購入、マンガや映画を見る、アニソンを聴くなどが挙げられた。コスプレについて詳細を聞いたところ、衣装はレンタルが可能であり、衣装を作るという金銭的、時間的な問題が解消されていた。また、特徴的な活動としては、YouTubeに公開されている公式の予告映像に字幕をつけるという活動があげられる。この活動の目的について確認したところ、タイ語字幕版が公開されていない作品をタイの人々に見せたいという動機が語られた。また、この学生はタイで公開されている映画の字幕についても、日本語から直接翻訳しているのではなく中国語圏からの間接的な翻訳であるため字幕の質が低いと指摘していた。日本国内においても海外の個人制作の作品で字幕の質が低いことは起こるが、タイの映画館で公開されている日本映画は大作ばかりである。実際に調査時にはBL小説の映画化『タクミくんシリーズ 長い長い物語の始まりの朝。』(日本公開2023年5月27日)および映画『サイド バイ サイド 隣にいる人』(日本公開2023年4月14日)が公開されており、8月下旬からは『クレヨンしんちゃんもののけニンジャ珍風伝』(日本公開2022年4月22日)および『東京リベンジャーズ2 血のハロウィン編 決戦』(日本公開2023年6月30日)の公開が予定されていた。字幕の質については今後更な

る調査が必要であるが、一ファンである消費者からのこのような指摘は日本のコンテンツの輸出において重要な課題となるだろう。

5. おわりに

本調査では、バンコクにおける日本コンテンツの市場調査を行った。調査の結果、正規品を扱う表の市場と非正規品を扱う裏の市場の実態が明らかになった。

今後の課題は以下の4点である。1点目は市場の売り手に対する調査である。今回の調査では、特に裏の市場において商品の仕入れがどこから行われているのかは明らかにならなかった。また、売り手が自分が販売している商品が非正規品であることをどの程度知っているかという点も疑問が残った。この点は更なる調査が必要である。

2点目は、消費者への更なる聞き取り調査である。前述のような市場環境において消費者が消費行動を行う際の正規品と非正規品の判断、購入店舗の選定などについては調査が必要である。また、本調査ではネット上のショッピングサイトの利用は確認できなかったが、このようなサイトを利用している人も多いと考えられる。実店舗とネット上での消費行動の違いについても確認したい。

3点目は、調査対象の拡大である。本調査では偶然映画館で日本作品の公開を知ることができたが、どのようなルートでどのような作品がタイへ入っていくのかについては今後の調査対象としたい。また、バンコクの街を歩いていると「カプセルトイ」が駅の中や商業施設の中に数多く設置されており、ガンダムベースと同じフロアには日本でも多数展開されているカプセルトイが数多く集まる「ガシャポンバンダイオフィシャルショップ」のゾーンも確認でき、しかもラインナップも日本との時差を感じないものが多かった。日本でも近年ブームが起きているカプセルトイの海外における受容についても調査の価値があると考えられる。

最後に、調査地の拡大である。今回はバンコクを対象としたが、同じ東南アジアでも日本コンテンツの受容の程度には差があり、その実態には違いがあると考えられる。しかしながら一方で、バンコクにある商品が正規品、非正規品かを問わず中国語圏から入っているものであることを鑑みるに、アジア地域では共通の流通網も存在していることが予測される。

謝辞

本調査にあたり、予備調査にご協力いただきましたデジタルハリウッド大学所属のPAKAPORN PHONGARAYAさん、インタビュー調査のセッティングにご協力いただきましたラチャモンコンラタナコーシン工科大学の先生方に感謝申し上げます。

参考文献

[1] 一般社団法人日本動画協会「アニメ産業レポート2022サマリー（日本語版）」
https://aja.gr.jp/download/anime-industry-report-2022_summary_jp(最終閲覧2023-08-28)